



学校法人
鎌倉女子大学

I Qも大事だが、C Q、P Qは、もっと大事！

－中等部・高等部卒業式式辞より－

卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。

今日、卒業式を迎えるに当たり、この3年間、あるいは6年間、皆さんが毎日胸につけて生活した、このバッジ、今も胸につけているが、このバッジを、手で、こうして、もう一度さわってみて下さい。

このバッジは、松本千枝子先生によってデザインされたものですが、そこには、言うまでもなく、「綺麗な心」と「聡明な頭」と「健康な体」を意味する「鏡」と「勾玉^{まがたま}」と「剣^{つるぎ}」が刻まれていますね。学祖・生太先生は、鎌倉女子大学に学ぶ皆に、これに象徴される3つの徳、3つの力を身につけてほしいと願われました。

先生は、心は、「自分が、自分が」、と自分の要求ばかりを主張するのではない、人さまの立場にもいつも心配^{こころくば}りが出来る「礼節」という徳をもたなければならないと言われました。殊に最近の日本人は、他人のことを批判し、攻撃することは、ホントに上手になりましたが、自分のことを振り返ってみる「慎みの心」をすっかりどこかに置き忘れてしまっているかのようです。これは、ホントに恐ろしいことだと思う。

また、頭は、「知恵」という徳をもたなくてはならないとおっしゃいました。いろいろものを知っていることは、無論いいことであります。でも、本当に知恵ある人は、ただ知識をもっているだけではない、それを使いこなすことの出来る人のことだと申します。知識だけもっていても、肝心なことが判らない人、肝心なことに使えない人は、本当に知恵ある人とはいえないでしょう。

そして、体は、「勇気」という徳をもたなければならないとおっしゃいました。そのため、君たちは、健康な体を鍛えなければなりません。体が萎えてくると、気力も起こらなくなるものです。姿勢が悪くなると、段々段々うつむいて、先生方のお話も心に届かなくなる、それと同じように、体が疲れてくると、新しい課題に挑戦しようじゃないかという勇気も湧き起こってこないものです。

この3つの力を兼ね備えた人は、どこにいても、人さまから喜ばれ、尊ばれることになるでしょう。その意味で、このバッジは、鎌倉女子大学に進学する皆さんの胸には勿論のこと、今日をもって本学を離れる皆さんの胸でも、これから先もずっと輝き続けていくものです。そのことを忘れずに、元気よく新しい世界に飛び出して行って下さい。

ピューリッツァー賞を3度もとったトーマス・フリードマンというニューヨーク・タイムズのコラムニストが、ある文明批評書を書いています。この本は、全米で200万部以上が売れ、25カ国で出版が見込まれているということですが、彼は、その中でこういう

ことを言っておりました。何かの参考にでもなればと思い、そのことを紹介して、君たちへのボクのはなむけの言葉としたいと思います。

これからの「世界では、IQ (知能指数) も重要だが、CQ (好奇心指数) と、PQ (熱意指数) がもっと大きな意味を持つ、と私は結論づけた。つまり、 $CQ + PQ > IQ$ という方程式が成り立つ。IQが高くても熱意のない子供ではだめだ。なぜなら、熱意と好奇心がある子供は、みずから学び、みずからやる気をかき立てるからだ」。

私は、このことはもっと簡単にこう言いなおしてもいいと思います。「ハートに火がつけば、誰でもが大変な勉強家になり、単なる優等生が真似しても追いつかない、人生で立派な成果を産み出すものです」と。人が自らやる気をかき立てる時、自分でも驚くような力を発揮するものです。

ハートに火をつけるには、どうしたらよいか。それには、いろいろな方法があると思いますが、その最大の方法の一つは、環境の変化を活用することです。鎌倉女子大学に進学する人も別の道を選択する人も、4月から、折角、新しい環境に身をおくことになるのですから、中学・高校時代、充実した生活を送ったと思う人は、「これを踏み台にして、もう一段飛躍しようじゃないか」と、いや、自分は少し力を出し切れなかった、やや不完全燃焼気味であったと思う人は、「リセットして、一から始めようじゃないか」と、環境の変化は、そういう心呼び起こすチャンスを私たちに提供してくれるものです。本当ですよ、人生、これからやっとな本格的に始まるのですもの。その意味で、卒業とは、新しい自分自身の創造へと、こう身構える時でもあります。

ご挨拶が最後になってしまいました。保護者の皆様におかれては勿論のこと、ご家族皆様、お喜び一入のことと存じます。また、鎌倉女子大学を信頼して下さいまして、大切な息女をお預け下さいまして、改めて心から感謝申し上げます。それと同時に、どうぞ末永い本学のおよき理解者・支持者でいらして下さいますようお願い申し上げます。私のお祝いのご挨拶と致します。今日は、本当におめでとうございませう。

※引用は、トーマス・フリードマン著『フラット化する世界』伏見威蕃訳、日本経済新聞社より。

[>前のページへ戻る](#)